

第二章 ヒアリング調査結果

第一節 本ヒアリングの対象者

本ヒアリングの対象者（以下調査協力者）は、若者自立塾（1名はサポートステーションの支援を受けた後でニートの状態を脱した者）28名（以下脱ニート者；男性26名、女性2名、平均年齢・標準偏差：26.71歳（±4.28）、中央値：26歳、レンジ：20歳－37歳）であった。

各調査協力者の選抜に際しては、（財）社会経済生産性本部から各地の若者自立塾を介して面接依頼を行い、承諾の得られた方々を対象に個別にヒアリングを行った。調査協力者の性別、年齢、学歴、面接時の就業状況については表1に示す通りである。

表1 ヒアリング調査の協力者一覧

協力者		性	歳	学 歴	面接時の就業状況
No.1	Aさん	女	23	大学卒業	自立塾在塾時に通った工場勤務
No.2	Bさん	男	26	大学中退	会社でアルバイト
No.3	Cさん	男	25	専門学校中退	ゲームのデバックのアルバイト
No.4	Dさん	男	23	大学中退	道路の白線引きのアルバイト
No.5	Eさん	男	35	高校卒業	派遣社員
No.6	Fさん	男	28	専門学校卒業	食品配送のアルバイト
No.7	Gさん	男	23	大学卒業	自立塾で紹介された会社で派遣社員
No.8	Hさん	男	28	高校中途退学	会社員
No.9	Iさん	男	33	大学卒業	会社員
No.10	Jさん	男	26	高校中退	飲食店社員
No.11	Kさん	男	27	大学中退	物品販売店のアルバイト
No.12	Lさん	女	22	高校卒業	派遣の医療事務
No.13	Mさん	男	26	大学卒業	工場での非常勤雇用
No.14	Nさん	男	25	高校中退	農作物の栽培と販売のアルバイト
No.15	Oさん	男	24	大学卒業	農作物の栽培と販売のアルバイト
No.16	Pさん	男	20	高校卒業	アルバイト
No.17	Qさん	男	22	中学校卒業	工場勤務
No.18	Rさん	男	31	大学卒業	工場勤務
No.19	Sさん	男	24	中学卒業	自立塾関連の紹介で、工場勤務
No.20	Tさん	男	25	高校卒業	工場勤務
No.21	Uさん	男	26	高校中退	工場勤務
No.22	Vさん	男	33	大学卒業	事務職
No.23	Wさん	男	26	高校卒業	旅館勤務
No.24	Xさん	男	32	大学卒業	ホテル勤務
No.25	Yさん	男	26	短大中退	会社で試用期間中
No.26	Zさん	男	30	高校卒業	機器メンテナンスの仕事に就職
No.27	AAさん	男	22	専門学校卒業	介護施設職員
No.28	ABさん	男	37	大学卒業	養鶏場職員

第二節 ヒアリングの方法

1. 面接者

面接調査には、臨床心理士の資格を持つ者7名および（財）社会経済生産性本部の職員1名が面接実施にあたった。臨床心理士の有資格者の5人は臨床心理学を専門とする大学教員（男性3名、女性2名）、2人（いずれも男性）は学位論文をほぼ修了している博士課程大学院生であった。（財）社会経済生産性本部の職員は、キャリア開発（キャリア・コンサルティング）の専門家であった。

2. 面接プロトコル

面接は、半構造化面接の形態をとった。「未就労（ニート）の状態に至る過程」、「未就労期」、「自立塾にて支援を受けている時期」、「現在」の4期について、生活の様子や、家族・友人や職場での対人関係、気持ちの特徴やパターンを明らかにするため、以下のような面接のプロトコルを準備した（表2）。面接プロトコルの質問に加えて、調査協力者についてより深い理解をめざして自由に質問を行った。さらに、補助資料として、面接時の調査協力者の表情、感情表出などの非言語的な様子に基づいた臨床的印象についても記録された。

使用した基本的面接プロトコルは、表2のとおりである。ただし、調査協力者によっては、面接内容について回答することが困難、あるいは拒否的であることがあるため、その場合は省略した。

3. ヒアリングの場所と方法

面接調査は、2006年12月中旬から2007年3月上旬にかけて行われた。面接場所は調査協力者の希望と都合を優先し、調査協力者が支援を受けていた若者自立塾及びその関連施設、喫茶店やファミリーレストラン、自宅などに出向き、直接対面形式で行われた。

ヒアリングに先立ち、面接者が協力者に対して本調査の趣旨と概要を説明の後、同意が得られた場合に同意書への署名を求めた。その結果、面接の承諾を得られた方々全員の同意が得られた。また、面接内容の記録を目的として、録音の同意が得られた調査協力者については、ヒアリングの録音を行った。ヒアリングの実施後、録音データのテープ起こしを行い、テキスト・データとした。

表2 面接のプロトコル

0. イントロダクション

A) 面接の説明：目的・時間・録音など。

(ア) 目的：「〇〇〇〇（若者自立塾の名称）」様にご紹介頂き、厚生労働省の委託により（財）社会経済生産性本部が実施をしている調査です。趣旨は就労に困難を抱える若者へのこれからの支援策のあり方を考えるために、実際に支援を受けた皆様に経験した感想などを中心に差し支えのない範囲で色々お聞きしたいというのが目的です。

(イ) 時間：時間は1時間～1時間半程度。

B) インフォームドコンセント：所定の書面を実施者が音読して確認。署名をもらう。

1. 未就労状態になる前

A) 学歴：小学校のときはどういう日々でしたか？その後どうしていた？・・・

B) 職歴：卒業後はどうしていた？

C) 生活習慣：このころ1日どんな生活をしていましたか？（ひきこもり状態の確認）

D) 対人行動：人づきあいはどうでしたか？

●家族とは？友人とは？心の支えになるような存在は？

E) 気持ち：そのころは日々どんな気持ちでしたか？どんなことを考えていましたか？
 どんなことを求めて（思い描いて、希望して）いましたか？

2. 未就労状態になるきっかけ

A) きっかけ：未就労状態になったのはいつころ？そのときどんなことがあったか？

3. 未就労状態にあるとき

A) 生活習慣：そのころ、1日どんな生活をしていましたか？

B) 対人行動：人づき合いはどうでしたか？

(ア) 家族とは？友人とは？心の支えになるような存在は？

C) 気持ち：どんな気持ちで、どんなことを考えていましたか？
 どんなことを求めていましたか？

D) 継続した要因：その状態が続いたことに、どんなことが影響していますか？

E) 支援についての考え：このときどんな支援が欲しかったですか？

また、もし自分が支援する立場なら「あのときの自分」にどんな支援をすると思いますか？

4. 支援を受けるきっかけ

A) 支援機関の情報入手経路：どこから〇〇のことを知りましたか？

B) きっかけ：支援を受けるきっかけとなるような人や出来事、その他のことが何かありましたか？

それはどんなものでしたか？

C) 気持ち：支援を受けに行く前はどんな気持ちでしたか？

5. 支援を受けているとき

- A) 期間・形式：〇〇にはどのくらい行っていましたか？それは合宿？通い？
- B) 支援内容：〇〇では、どんなことをしていましたか？
(ア) 特によかった点：〇〇でしたこと、やってくれたことの中で、あなたにとって、良かったと思うのはどんなことですか？どんなところがよかった？
(イ) 特によくなかった点：逆に〇〇でしたこと、やってくれたことの中で、あなたにとって、よくなかったと思うのはどんなことですか？どんなところがよくなかったですか？
- C) 影響や変化：支援を受けることで、自分の行動や気持ちはどのように変化した？
(ア) 生活習慣：1日の生活は、はじめのころはどう？その後どう変化しましたか？
(イ) 対人行動：人づき合いは・・・はじめのころ⇒その後どう変化？
(ウ) 気持ち：気持ち・考え、欲求は・・・はじめのころ⇒その後どう変化？
※1番変化したところはどのようなところでしょうか？
※あまり変化しなかったことは？
※（人に頼ったり相談したりすることの抵抗感など気持ちの変化は？）
- D) その他の支援資源：〇〇以外に、あなたの助けや支えになった人や機関をあげるとすれば、それは何ですか？どんな影響がありましたか？

6. 就労のきっかけ

- A) きっかけ：就労するきっかけとなった、出来事や人との関わりなどがありますか？
・特に、就労に結びついた支援機関の支援はありましたか？どんなものでしょうか？
その支援があることであなたにどんな変化がありましたか？
- B) 気持ち：就労に至るとき、どんな気持ちで、どんなことを考えていましたか？
どんなことを求めていますか？

7. 現在について

- A) 気持ち：どんな気持ち？どんなことを考え？求めていますか？今後の目標は？
- B) 成長可能性：ふりかえってみて、自分を助けた自分の長所は？
それが生かせるようになったのはどうして？
それまで生かせなかったのはどうして？

第三節 調査結果

面接プロトコルの質問内容を中心に、事例間にみられる共通点や相違点を抽出しながら、ヒアリングから得られた情報を事例横断的にまとめた。以下、ヒアリングで聴取された脱ニート者達の経験を（１）前就労期、（２）未就労期、（３）被支援期、（４）現在について記述する。なお、各事例の概要については、「データ・参考資料編」の中で付表を示した。

1. 前就労期

主に就学期の体験について、学歴および職歴、当時の生活習慣、対人関係の特徴、どのような気持ちで過ごしていたかを尋ねた。

今回の面接協力者28名のうち7名が高校、専門学校、大学を中退し、そのまま未就労の状態となっているという共通点をもっていた。‘中途退学’はしていない者でも、予備校や浪人の途中で進学することをやめたり、アルバイトや常勤の職についたが短期で辞職したりを経験しており、一般的なニートの状態にある若者の多くが同様の経験をしていることが推測される。

興味深いのは、ほとんどの調査協力者が、前就労期の過程で何らかの対人的な問題を経験していることである。中途退学経験者のなかには、いじめなどが原因で小学校や中学校で不登校の状態となり、高校や大学進学後に中退を経験しているという者（Hさん、Jさん、Kさん、Pさん）が目立った。

【Jさん：26歳男性、高校中退後、断続的引きこもりを7年行う】

小中学生のときにいじめられて学校行ってない。中学校は半分くらい行ってないです。小学校は小5の三学期から。6年生はほとんど行ってない。高校は受かったけど。そのあと辞めちゃって家にいる。そういう感じ。いろいろ外には出ていたんですけど。遊んでいたって…。

また、明確ないじめや中途退学の体験がなくとも、ニートに至る過程に何らかの対人関係の問題が関与していると思われる述懐が得られた。一般的に指摘される、生きづらさ、居場所のない感覚を抱えている者が少なくなかった（Aさん、Nさん、Tさん）。

【Aさん：23歳女性、大学卒業するが、就職活動せず実家に戻る】

私は集団の輪の中に入っていきのがすごく怖い。仲良い人は二、三人とかいけばいいと思ってるんだけど。でも私はあんまり人間関係とかあるとしんどくなるから、二三人

いればいいというタイプだから。就職活動すること自体すごく怖くて。高校生のときもアルバイトはしてたんですけど。バイトってというのがどういうものかわからなくて。アルバイト先の店長とうまくやりとりができなかったし。バイトの段階でもう怖いって思っちゃってたから。

【Nさん：25歳男性、高校を1年で中退】

居場所がない感覚が子どもの頃からの体験がある。家庭環境がちょっと良くななくて、親の離婚とか再婚とかで振り回されていた感じがあります。家もいやですし、学校もいやですし、居場所がなかった。落ち着く場所がないって感じでしたね。高校の頃で精神的にきつかったが、助けを求めたり相談したりはなかった。自分で抱えていたって感じですかね。

【Tさん：25歳男性、高校3年で中退後、通信教育高校を卒業】

学校を辞めた理由は、馴染めなかったので、嫌いになった。2、3人でやる実習の授業がうまく行かなかった。…（中略）…3年では自分たちでやらなければならなかった。自分たちで実習テーマを決めてやる。それに乗れなかった。周りからもダメといわれ、自分でもダメと思った。3年生の始めだった。人とうまく行かないのは以前から。小学生時代もクラスメートとは馴染めなかった。小学時代から仲の良い友人は一人居る。彼以外とはダメ。その友人との接点は自分が電車好きで、彼も同じ。それで気が合った。共通の趣味があった。

また、アルバイトや常勤の仕事に就いたものの、他人とうまくやれないことを理由として辞めた経験をもつ者が多いことも印象的であった。他人とうまくやれずに退職、転職を繰り返すことから、仕事に必要な能力や対人スキルが身につかず、就労しにくい状態になってしまう悪循環が生じている様子が見てとられた。

【Iさん：33歳男性、大卒後複数の職を転々とする】

長く勤めればいいんですけど、すぐ辞めたりとかしたので。職業能力が身につかなかった。（辞めてしまった原因は）精神的に弱いところですね。人から何かいわれたら気にしてしまう。あとちょっと忍耐力が足りなかったですね。

2. 未就労期

調査協力者の多くが、高校や大学を中退し家にひきこもるようになりそのまま就労しない

状態になっており、前就労期と未就労期との境界は必ずしも明確ではない。したがって、調査協力者のなかには、未就労期と前就労期から若者自立塾で支援を受けるまでの時期がオーバーラップしている者も多かった。面接では、未就労期すなわちニートの状態にある個人が、何を考えどのような生活を送っているかを、生活パターン、対人関係の様子、気持ちについてふりかえってもらった。

多くが、自宅で‘ひきこもり’状態となり、昼夜逆転し食事も不規則、ゲーム、テレビ、読書をして時間を過ごすということをしていたようだ。比較的規則的な生活を送り、昼夜逆転の生活は経験したことはないという協力者も数名いたが、そうした事例は例外的であったといえる。

また、注目すべきことは、そうした無業状態にいる彼らの多くは、その状態に留まっていることを必ずしも良しとしている訳ではなく、少なからぬ焦りと罪悪感、無力感にさいなまれている者が多いということであった。さらに、表面上は淡々とした語りをしながらも、その状態をあえて深刻にとらえようとしない、一種の防衛的回避を行っている様子も伺われた。

【Mさん】

面接者：そういう時期って長かったんですか？

Mさん：そうですねえ、そういう時期が半年ぐらいでしょうか。情けない話ですけど、自分でもどれぐらいの期間だったか覚えていません。そういうときの、ずっと寝たきりでって、いうのがあって、

面接者：ご自身の気持ちとかっていうのは、働くことについてとか？

Mさん：そうですね。本当に複雑な気持ちでした。働かなくちゃ生きていけないって思ったり、両親に申し訳ないと思ったり、悪口言われた元同僚だとか上司を憎んでみたりだとか、複雑です本当に。

面接者：ずっと家におられたら、結構色々、考えたりするのかなって思いますけど。

Mさん：じっとしていると本当に他にすることがないんで、色々と考えてしまいました。(中略) やっぱりじっとしているとろくなこと考えないし、体も弱くなっちゃいますし、本当に良くないと思います。

【Cさん】

面接者：その時の気持ちや考え？

Cさん：本当にその日暮らしというか、先のことを考えないようにしている。考えないようにしていたし、考えてもいなかった。

面接者：どんなことを求めていた？

Cさん：その当時はその日暮らしを求めている。

面接者：ずっとこのままでいられれば？

Cさん：そうですね。あんまり先のことは考えないようにしていた。

【Nさん】

Nさん：時期が長いってというか、目的も無く過ごしていたので、（読んでいる）本以外にもそんな記憶もないですし、ただもう、あっという間に何年も過ぎてるなって、感じですね。

面接者：家族の方はその状態については、なんておっしゃってました？

Nさん：直接はいわなくてもプレッシャーみたいなのはありましたね。働けとか、外に出ろ、勉強しろとか。直接は言わない分プレッシャーとかはありました。

面接者：その頃の気持ちはどんな気持ちでしたか？

Nさん：自分だけ置いてかれたような感じですかね。焦りがあって周りの人が働いたり進学したり、そういう話を聞いているのが結構辛かったり、それでも自分が何かやろうとしてもできないって言う。置いてかれたようなかんじ。

ひきこもり状態にある時は当然ながら、対人関係に対しては非常に回避的になっている傾向が読み取れる。学校を中退したり、仕事を辞めると同時に友人とのつながりを絶つ者も多かった。しかし、まったく社会的に孤立しているという者も比較的少なく、家族や少数の知人、友人とは狭い交流を続けている者が多かった。

【Nさん：25歳男性、高校を中途退学】

最初の頃は2、3年ぐらいい外に出ていたんですけど、段々出なくなってきて。ここ（自立塾）にくる2年3年ぐらいいほとんど外に出ませんでした。家の中でやることは限られてて、昼ぐらいい起きて、寝るときはもう自由というか。あとは一日中…（中略）…時期が長いってというか、目的も無く過ごしていたので、本以外にもそんな記憶もないですし、ただもうあっという間に何年も過ぎてるなって感じですね。（ひきこもりに対して家族は）直接はいわなくてもプレッシャーみたいなのはありましたね。働けとか、外に出ろ、勉強しろとか。直接は言わない分プレッシャーとかはありました。（中略）中学、高校とかの幼馴染と最初の頃は会ってましたけど、だんだん年数がたつとお互いに会わなくなってくるのでほとんど疎遠になってきましたね。

脱ニート者らは、未就労期の時期をどのような気持ちで過ごしているのか。気配な生活のなかで、「何とかなるだろう」と受身で過ごす者がいる一方、「何かしなければ」という思いがありながら動けない自分への焦りや、対人的交流がなく相談する相手もおらず、動きのとれない状態のジレンマを持つものもいた。

【Jさん：26歳、男性、高等学校中退の経験をもつ】

小中学生のときにいじめられてまして。学校行ってないんですね。中学校は半分くらい行ってないです。小学校は小5の三学期から。6年生はほとんど行ってない。高校は受かったけど。そのあと辞めちゃって家にいる。そういう感じ。いろいろ外には出ていたんですけど。遊んでいたっていうほどいいもんじゃないですけど。

(中略) 寝ていました。起きてるのがつらい。何もしていないけど。疲れちゃって。一日一回だけの食事だったので。胃液だけ吐いてました。胃がバカになっているんで。すぐ出ます。疲れたまっていたりすると痛くなったり。いつも胃もたれしてます。学生時代にやっちゃったせいなのかなって。ストレスではないけど。で、●●(施設名)に出るまでは、ずっと家…高校やめて15歳でしたけど。だから7年間くらい。

(中略) 今26。その間にパソコンのこと教えてくれる教室には通ったことあったんですけど。学校とかは。なんとかしなきゃとは思っていたんですけど。相談する相手もいなかったです。なんも自分で決められないで。そんなんなっちゃいました。

(中略) (7年間) なんも考えてなかった。思いつかなかった。なんか。ただただ楽しくないなって。楽しいってどんな感じだろうな。友達がいて、人と付き合っただけで楽しいとか。そういうのがよくわからないですね。

【Zさん：24歳男性、複数の会社に勤務するが比較的すぐに辞めている】

仕事を辞めてから生活習慣が悪くなったとか。あまり良いとはいえない。だらだらとしていた。その頃はインターネット引いていて、それをやっていた。もう少し勉強すれば良かったかなという気持ちはあります。(インターネットでは) チャットとかホームページを見ていたりとか。(生活のメインは) 就職支援施設に行くか、家にいるか。早く就職を決めるということで。就職支援施設に通っていた。今思えば、何をやっていたか分からない。…(中略)…特定の人としか付き合わなかった。(特定の方は) 4、5人。仲の良い友人としか付き合わなかった。…(中略)…あまり良い人間関係ではなかったと思います。…きついことを言われるわけでもなく、自分のためにあまりなっていなかった。親身になってもらってなかった。(両親とは) ケンカばかりしていた。就職しろ、早く仕事しろとか。いつもケンカしていました。正社員になれとか。反発していた。(親には) 逆らっていた。口を

出すな。聞く耳を持たずに。今思えば恥ずかしいんですけどね。

3. 被支援期

調査協力者らは、さまざまな形の未就労期を過ごした後、若者自立塾での支援を経験することとなる。何が若者自立塾につながったきっかけやチャンネルとなったのか、脱ニート者らが支援の内容をどのように受け止め、どのような自己変容があったと感じているのかを明らかにすることは、今後の支援策の手がかりの材料となると考えられる。以下、ヒアリングの内容を「若者自立塾の支援を受けるきっかけ」「支援の内容とその長短」「若者自立塾の影響や自身の変化、気持ち」についてまとめる。

若者自立塾の支援を受けるきっかけ

若者自立塾の支援を受けるきっかけは、親を中心とした他者からの勧めによるものと自ら自発的にきっかけあるいは支援を求めて若者自立塾に至るものの2つに分けられる。

まず、他者からの勧めによって入塾したのは面接協力者28名中19名であったが、そのうちの16名（Bさん、Cさん、Dさん、Eさん、Hさん、Lさん、Mさん、Oさん、Pさん、Rさん、Tさん、Uさん、Vさん、Wさん、Xさん、AAさん）は、家族（殊に、母親）からの強い勧めや後押しがあって入塾に至っている。家族以外のアプローチにより入塾した事例は、Nさん（家族の知人）、Sさん（親戚）、ABさん（臨床心理士）のみであった。しかし、そこに至る過程は単純ではないようで、当初はそれほど乗り気ではなかったが、体験入塾等を経て入塾しているケースなど多様であった。

例えば、以下のDさん（25歳男性）は、父親が若者自立塾のことを知り、母親が手続きを進めた経緯をもつ。

面接者：じゃあ例えばここにえーとこういうのがあってお父さんとか聞いてきて、
あなたに言ってきたわけでしょ、じゃ行ってみようと思ったのはどうして？

Dさん：行ってみよう…連れてこられたって感じですね。

面接者：ああ、否応なしにということ？

Dさん：はい

面接者：行くぞ！って感じですか。

Dさん：はい。

面接者：覚えてます？どういうことだったか。

Dさん：（母親が）なんかもう書類かなんか送っちゃってたんで。じゃもう行こうかなと思っ
て。しょうがないなって。